

『十里霧中』

息子たちのイギリス公立校体験記(3)

豊田 一秀

九月はイギリスの新学期である。十四歳と十二歳の二人の息子たちはイギリスの公立校に自転車通い始めた。二人の通う学校はコンプリヘンシブスクール (COMPREHENSIVE SCHOOL) と言って、日本で言えば中学校と高校を合わせたような児童数千三百人の総合制中等学校である。森に囲まれた、レンガ作り一部二階建のこの学校で、二人は、

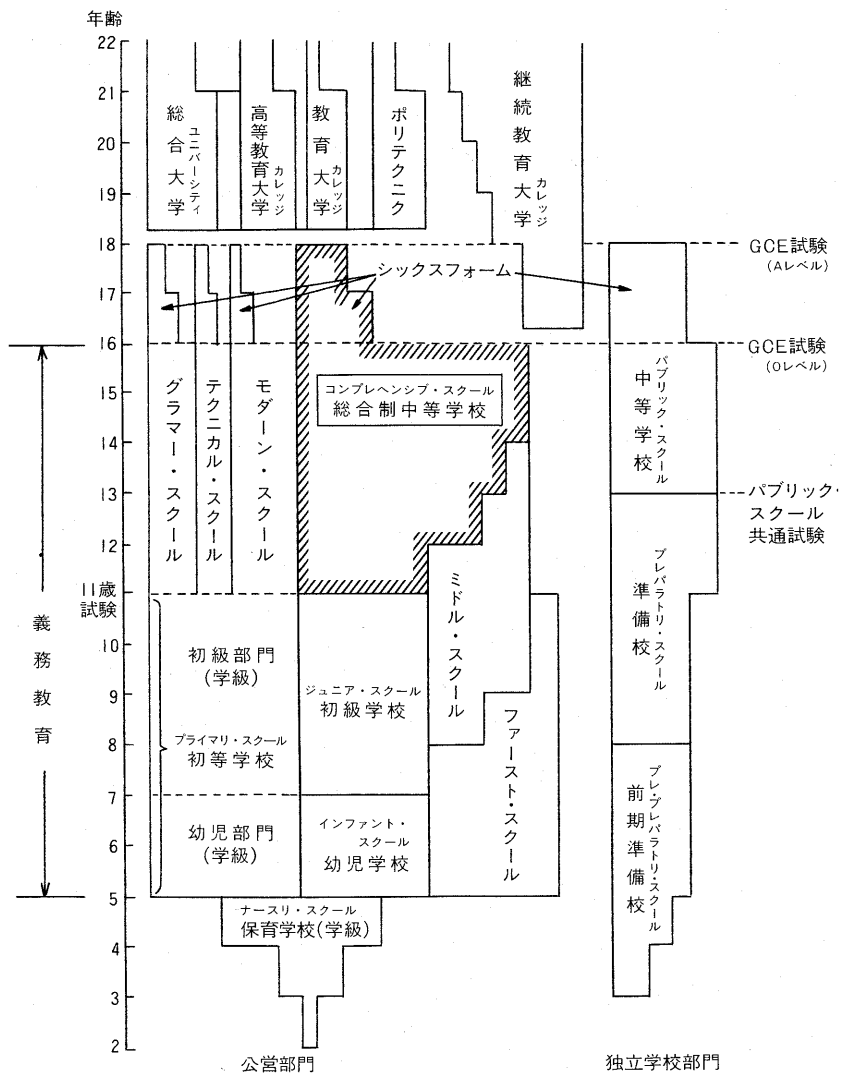
学校が初めて体験する、そして唯二人だけの日本人の生徒として学校生活を送り始めたのであった。

まず授業であるが、この学校の授業科目は選択科目も多いので生徒によって異なるが、上の息子は英語、数学、地理、理科、歴史、宗教、音楽、体育、美術、家庭科、技術科、ドイツ語、フランス語を選択した。下の息子もドイツ語をはずした以外は同じ

である。これらの授業が、当り前とは言え総て英語で行われるのであるから、息子たちの苦勞は如何程であろうか。語学に至っては、今どちらの言葉で話しているのかさえ当初は分からなかったと言う。そのような状況の中で、救いは音楽、体育、美術であった。日本にいる時からこれらの科目が好きであった二人は、言葉に頼ることの少ないこれらの科目の中で多少は自分を出せたようである。この他、数学は日本の方がかなり進んでいるので、これまでは決して得意とは言えない数学であったが、文章題以外は問題ないようで、これらは先生や友達からの評価も得られたようであった。

この学校はコンブリヘンシブ（総合）が意味するように、英国の教育政策の一つとしてこれまでのモダンスクールとグラマースクールという性格の異なった学校を統合した形の学校である。近年増えつつあるこのスタイルの学校は、学校間の格差是正や教

育の機会均等などを一つのポリシーとしている（イギリスの学校制度については次頁の表を参照されたい）。そこには当然、能力的、経済的、階層的に様々な子どもたちが集まってくる訳で、このハワード、ケンブリッジに入る生徒もいれば、併設されているシックスフォーム（高校）に行かないで十七歳から働き始める子どもも少なくない。従って学校としても多様な対応を求められているのである。授業においても多くの課目は能力別に五つのクラスに分けられていて、上のクラスと下のクラスでは雰囲気が大分違うようであった。息子たちは言葉の問題があるので、下のクラスから始めてみようという事になっていたのだが、そのクラスには行動、成績、能力、意欲などにおいて問題を抱えている生徒もいて先生の苦勞も多いようである。ただ、息子たちはそのクラスの雰囲気が入ったようである。授業中に起



▲イギリスの学校制度 (稲垣忠彦編『子どものための学校』東京大学出版会より)

こるいろいろな話を面白そうに聞かせてくれた。勉強のレベルが高くなく、先生も無理をして教え込もうとすることがないので、子どもたちは親切でんびりしている。英語について行くだけで必死な息子たちにとっては居心地が良かったのかもしれない。

秋の学期が終わる頃に先生から話があって、次男のセット（能力別クラス）を一番上か二番目に変えてみたいとの話であった。理由は次男の成績が良いからというわけではなく、低いセットだといろいろな生徒に先生の手が掛かってしまうので、次男の英語まで手が回らないからという事と、もう一つ面白かったのは、低いセットにしていると「悪い習慣」が付いてしまうからという事であった。先生の好意に感謝しつつも、低いセットにいる子どもたちを、暗に半ば諦めている学校の姿勢が感じられた一事であった。肝心の本人は面白い友達がなくなってしまう上に、勉強が忙しくなってしまうと涙顔で反対

した。私は次男の気持ちも良く理解できたので、学校の好意に対して失礼にならないようにしつつ次男の意向を先生に伝えた。先生も本人の気持ちを良く理解して下さって、どうしても嫌だったら又戻してあげるから、しばらく試してみようという妥協案を出して下さり、次男も納得した。新しいセットに移った次男は、授業の雰囲気が全く違うと驚いていた。幸いなことに、次男は新しいセットの雰囲気に慣れ、友達も出来てそこに落ち着いた。

友達と言えば、こんな出来事もあった。十月の初旬、学校から帰って来た次男が「これから家に友達が遊びに来てくれる」と張り切っている。しばらくすると自転車に乗った少年がやって来た。我が家に初めて来てくれた子どもの客人である、両親も内心緊張気味に迎える。なかなか堂々とした態度で自己紹介すると、二人は庭に出て会話らしい会話もないままに長い間サッカーをしていた。スポーツ様々で

ある。その日以来彼はよく家に遊びに来るようになり、おやつを食べた後、夕方までいる日もあった。あまりによく来るので、少しも困りはしないものの、はて?と思っていると、ある日、その子と次男の入っているサッカークラブの監督が家にみえて、その子について語り始めた。話によれば彼の父親は継父で、経済的にも苦しくて、その子に暴力をふるう時もあったりするらしく、決して良い家庭環境ではないそうなのだ。学校でも友達が少ないので、宜しく面倒を見てやって欲しいとのことであった。監督の奥さんは次男たちの学校の先生をしていることもあって、よくその子の事を把握できているようであった。私達はその子がよく遊びにくる理由が少し理解できたような気持ちがあった、と同時にどここの国でも同じような家庭の問題があるものと身近な体験を通して感慨を持った。そしてこのような地域社会の小さな問題に触れられるのも、地元の公立校に



▲うじ虫レースにみんな夢中

子どもたちを入れたおかげだと妻と話した。

最後に、秋の行事であるオータムフェア（AUTUMN FAIR）について紹介しておこう。これは学校と父母の共催で行われる一種のバザーで、売上は学校施設の充実に使われる。イギリスの学校は普通は土曜日が休みであるが、この催し物は十月の中旬の土曜日の午後、校舎と校庭を一杯に使って行われる。日本の学校で行われるバザーと比べて共通点も多いが違いも又少なくない。不要品や古本のコーナー、軽食、ワタ飴、手作りのケーキ、クッキー、植物の即売などは日本でもよく見られるが、イギリスの国民性と言うか賭け事が多いのに驚かされる。一枚二十ペンス（約三十円）で一等二百ポンド（約三万円）の当たる、番号合わせによるくじ引きを始めとして、サイコロゲーム、回転するバーを指定の場所に着まく止めるゲーム、おもちゃの牛の乳しぼりゲーム（一分間で絞れる量を競う。私はこの後、二、三日ペン握る手がおかしくなってしまう

た）、果てはうじ虫這わせ競争まであって（自分の賭けたコースの虫が一位になると勝ち。妻はこれに見事勝って、二十ペンスの出費で四十ペンスを得た）、学校はさながらカジノの観を呈す。先生たちも負けじと出した店は、先生たちの幼少時の写真を示して、どれがどの先生の幼少時の写真か当てさせるといふものであった。これも御多分にもれず立派な賭けになっている。いくら資金集めの為とは言え、日本では考えられない光景であった。この他にも、校庭で本当の車の運転を教えてくれるドライビングスクール、乗馬、ゴカート、アーチェリーなどが行われ、秋の一日を家族で楽しく過ごすという趣向のようであった。好天に恵まれ、私達も興味津々で土曜の午後を楽しく過ごした。

学校は、この一週間後からハーフタイムという十日間程の秋休みに入る。緊張の続いた息子たちもホッとできるひと時である。

（元お茶の水女子大学付属幼稚園）